

追悼 村田久さんの思い出

天野恵一

北九州の村田久さんが亡くなったという連絡は武藤一羊さんから来た。その電話連絡を受け取る前日に、北海道から出てきていた越田清和と久しぶりに会い、ゆっくりと話をする機会があった。その時、彼が「村田さんと花崎（皋平）さんのやりとりをまとめてパンフレットにする編集をお手伝いしているのだが、村田さんの体調がよくない、いそがなければ」と話していた。だから、まったく予想できない話であつたわけではないが、いくらなんでも、こんなに早く、との気持ちがおみあげ、連絡を受けた私は言葉を失ってしまった。

私は村田さんとそれほど親しく交流する時間を持つた人間ではない。門司の山荘で会つた「周辺事態法を軸とした合宿討論会」は一九九九年一〇月に持たれているようだから、この、もっぱら村田さんの強力な提案と準備によつて生まれた、「全国反戦合宿」の直前に出会つたのだと思う。今までのように東京ではなくて、地方が主催で合宿討論会という話をつめるための会議（それも合宿）が持たれたときが出会いの場所だつたはずだから。門司から佐世保・岩国・名古屋へと続いたこの「反戦合宿」に私は東京から参加し続け、そこでの交流が軸であつた。九州地方の合宿の時は、車で、あちこちつれていただき、大変に世話になつた（こういう時は、とにかく面倒見のいい人だつた）。それ以外は、突然東京に来たときなど数度、お会いしているという程度であるはずだ。ただ、とにかく笑いが絶えない、大声の明るく元気な人だつた。「あのネ、あまのさん、あのさ……」と笑いかけながらまくしたてる彼の語り口の人なつっこさは、なんとなくトゲトゲしく対立的な討論をなごんだムードにつくりかえる独特の力を持つていた。

彼とのやりとりで、一つだけ強烈に印象に残っている彼の話がある。たぶん名古屋での合宿の時だつたと思う。村田さんが、あの「沈黙の左翼詩人」として奇妙に高名な谷川雁をリーダーとする「サークル村」の関係者だつたことを知らされたとき、「谷川雁でどんな人だつたんです

か」と質問したら、彼はこう答えたのである。

「あまのさんだつたら、武藤一羊さんがアジアを歩いてきた話、国際会議をこえて歩いて各国・各地で闘っている人々と会つてきた話をなんども聞いたことがあるでしょう。それつて『へえ』てなもんで、とてもおもしろいでしょう具体的で、自分らはなんにも知らないんだから。谷川さんは、その国内版。各地を歩いてきた話をみんなにしてくれたんですよ。私をふくめてみんな『へえ』てなもんでしたよ」。

なるほど、私の胸にストンと落ちるとつてもよくわかる説明だつた。その時、こんな話もしてくれた。「最近ね、たいへん優秀な若い研究者が、とっても緻密な『サークル村』の研究論文を書いて、『思想』に発表してくれてね。でもネ、その人『サークル村』の地域に来て残っている関係者に聞くつてことは一切なかつたんだよ、歩いてなくて文献だけ。そういう優秀さつて信用できる？ さびしいネエー」

この言葉も、歩いて、出会い、くつちやべる関係を大切に運動を生きてきた村田さんらしい言葉として忘れがたい。

村田さんに感じたのは「オルグの活動」といつた一つの政治的方針へ向けて人々をまとめるというイメージとはほど遠いものであつた。彼は、自分自身が新たな人との出会いをすつかり楽しんでいふことを全身で示していたのである。歩き、具体的に人と会い、話しこむ。ネット・コミュニケーションの時流に抗つた、この古典的スタイルの人物がまた一人、私たちの運動の中から消えてしまった（もつとも村田さんはメーリングリストの管理人を引き受けて熱心にやつていたが）。

歩行困難になつてもう三年ちかくなる闘病生活の私は、「歩き、会う」空間が限定されて久しい。村田さんは、いなくなつてしまつたけれど、なんとかかつてのように北九州はもちろん闘争現場各地を飛び回りたいものだと思つた。

（あまの・やすかず／反安保実行委員会）